「用の美」探求 意義語る

シンポジウム 国画会工芸と沖縄 ■上■

県立博物館・美術館で開催中の「90回記念国展工芸沖縄展」会期が迫る現代 匠の系譜」で、シンポジウム「国画会工芸と沖縄」が25日、那覇市の同館講堂で開かれた。2回にわたり詳報する。

第1部では東京国立近代美術館工芸館の鶴田正則主任研究員が「国展工芸について」と題して基調講演した。続いて開かれたパネルディスカッションでは沖縄県民藝協会の平野良和会長司会に、諸山氏、日本民藝館の杉山享司学芸部長、与那嶺美術館の横山雅男、国画会工芸部顧問、国画会工芸部顧問兼工芸作家の松崎染織家の祝嶺恭子氏が登壇した。

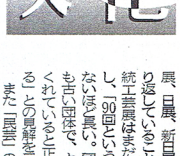
諸山氏は国画会前身の国画創作協会の成り立ちから切り出した。1918年に官設公募展の文展（文部省美術展覧会）を「権威主義的で、どうやら審査に対する（不満の思いがあった」と反発した京都の新鋭の日本画家らが結成。反官展を掲げ、在野あって自由な創作に徹したという。

「理念は薄いところもあったが、若い気概があった」と解説。その後、洋画や版画、写真部門が開設され、1927（昭和2）年に工芸部門が設置されたことを紹介した。

「昭和初期は工芸の世界が大きく動き出し、美術工芸という分野が確立していく時代だった」と述べた。

文展が名称を変え、帝展、帝国美術院美術展覧会（帝展）や新文展、日展、新日展と改組を繰り返していくなかで、日本伝統工芸はまだ63回目だとし、「90回というのは尋常でないほど長い。団体として最も古い団体で、よくぞ残ってくれていると正直思っている」との見解を示した。

また「民芸」の新語をつくり、日本民藝館設立に携わっ



工芸沖縄展

諸山氏「在野にあり自由な創作」

杉山氏「個性生かし人間らしく」

「国展工芸について」を演題に基調講演する鶴田氏=25日、那覇市おもろまちの県立博物館・美術館

『国展工芸沖縄展』は県立博物館・美術館で10月2日まで。入場料は一般1200円。小中高校生は500円。問い合わせは沖縄タイムス社文化事業局、電話098（860）3588（平日午前10時～午後6時）

シンポジウム「国画会工芸と沖縄」で5人のパネリストのディスカッションに耳を傾ける聴衆

について、「民芸運動を推進し、日本の工芸の重要性を訴える立場にあり、個人作家としての活動を繰り返しながら、国画会でも指導的立場にあった」との持論を展開。

柳の文章を引きながら、日展の特徴がアカデミック（学術的）としたに上で、国展は「もっと自由」実用性が高い。自由な創作で、用の美を求めたと述べた。さらに「創意の発露と在野であるべきだという特性を確実にしてきたことで、今日まで通じる国展90回の歴史が作られたのではないか」と述べた。

パネルディスカッションでは、ガラス作家の船木衛氏との交流についても紹介した。

◆ ◆

パネルディスカッションでは、民芸運動を推進した日本民藝館の杉山氏は民芸運動と国画会の関わりに特化して報告した。国画会工芸部を設立した陶芸家の富本憲吉と八ーナード・リーチの出会いやその交流などをひもといた。

リーチや柳らが武者小路実篤や志賀直哉らと創刊した文芸雑誌『白樺』の創刊の経緯も解説した上で、「国画会工芸家の河井寛次郎研究に携わっているとや、ガラス作家の船木衛氏との交流についても紹介した。

◆ ◆

パネルディスカッションでは、民芸運動を推進した日本民藝館の杉山氏は民芸運動と国画会の関わりに特化して報告した。国画会工芸部を設立した陶芸家の富本憲吉と八ーナード・リーチの出会いやその交流などをひもといた。

リーチや柳らが武者小路実篤や志賀直哉らと創刊した文芸雑誌『白樺』の創刊の経緯も解説した上で、「国画会工芸部顧問兼工芸作家の松崎染織家の祝嶺恭子氏が登壇した。

「民芸」に宿る力 説く

杉山氏 柳宗悦の沖縄観紹介

県立博物館・美術館で開催中の「日本民藝館80周年 沖縄の工芸展」柳宗悦と昭和10年代の沖縄」の関連行事で、民藝館学芸部長の杉山享司さんが24日、同館講堂で「柳宗悦と沖縄の工芸」と題した文化講座を開いた。杉山さんは柳宗悦は美を通して社会や暮らしのあり方を問うたとした上で、「現代の力の論理と不寛容な社会に立ち向かうため、沖縄の土地に息づく力を大事にしなければならない」と述べ、民芸に宿る力の重要性を説いた。

杉山さんは、日本民藝館を創設した初代館長で沖縄に魅了された柳の沖縄観を解説。「柳は精益々の信仰」とみ沖縄の人々の生活を支配する原理で、沖縄の美を理解するための鍵と考えた」と述べた。

柳は1889年に東京で生まれ、無名の工人が作る民衆の日常品の美に注目。1925年に「民芸」という新語を作り、東北・九州・沖縄などを訪れ、調査収集を行い、61年に死去した。

杉山さんは柳の生い立ちや家族構成、師匠・友人関係などを紹介しながら、生涯をもといた創刊に参加した白樺一時代にヨーロッパやゴッホの西洋美術を日本に紹介したが、朝鮮陶磁器や木喰仏の出会いから「民芸」に至り、沖縄と出会うまでの柳の歩みを語った。

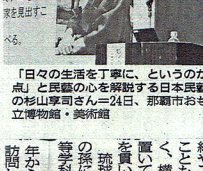
朝鮮陶磁器に訪かれた柳の「柳は器物の美にとどまらなかったという。「柳は日本文化への同化政策への異議申し立てを行い、民族文化を擁護した」と説明。のちの沖縄での「方言論争」につながる経緯やアイヌの文化に訪かれたことも紹介し、「柳は上下なく、様の関係で対等に価値を置いていた」と文化相対主義を貫いたと強調した。

琉球王国最後の国王・尚泰の孫にあたる尚昌ら学者院中等学校で同級生だった柳は38年から40年までに4回沖縄を訪問したという。

その過程で、当初柳を招いた沖縄県学務部との関係が悪化する様子も説明。海岸線で撮影していた際、「海岸警備上の秘密を撮影した」として、県警に連行された逸話も紹介した。柳は釈放されたが、写真家の坂本万七は警察に入れられたという。「柳は標準語を使う必要性を認めつつも、琉球語をおろそかにしてはならない」と主張した」と述べた。

また柳の一行の世話役にあたったのが「量の織物」の人間国宝の宮平初子さんだったとエピソードも披露した。

同展は10月23日まで。10月1日は担当学芸員の外間一先さんが学芸員講座を開く。



「日々の生活を丁寧に、というのがすべての原点」と民藝の心を解説する日本民藝館学芸部長の杉山享司さん=24日、那覇市おもろまちの県立博物館・美術館